

精神科臨床実習前から実習後までの精神障害者に対する看護学生の意識の変化

著者	小林 淳子, 伊藤 尚子, 板垣 恵子, 大森 蔚子
雑誌名	東北大学医療技術短期大学部紀要 = Bulletin of College of Medical Sciences, Tohoku University
巻	3
号	1
ページ	63-72
発行年	1994-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/33565

精神科臨床実習前から実習後までの精神障害者 に対する看護学生の意識の変化

小林 淳子, 伊藤 尚子, 板垣 恵子, 大森 蔚子*

東北大学医療技術短期大学部看護学科

*東北大学医学部附属病院

A Longitudinal Study of the Awareness of Student Nurses During Nursing Practice at Psychiatric Clinic

Atsuko KOBAYASHI, Hisako ITO, Keiko ITAGAKI and Shigeko OMORI*

Department of Nursing, College of Medical Sciences, Tohoku University

** Tohoku University Hospital*

Key words: 精神障害者, 意識, 精神科臨床実習, 看護学生

We studied the change of the awareness of student nurses for the patients in psychiatric clinic during their nursing practice in the Tohoku University Hospital.

A longitudinal study was conducted by questionnaire before and one week after and at the end of their practice.

Prior to the practice, 47.4% of the students were afraid of meeting patients and 61.8% did not feel friendly to the patients at psychiatric clinic.

After their performing one week practice, many students had no fear for patients and began to feel close to them.

At the end of their practice at psychiatric clinic, they understood how difficult it is to nurse, and the increase in their interest and desire to study also showed the successful education in psychiatric clinic.

はじめに

精神障害者は、精神症状のために理解し難いという印象を与える場合もあり、また自傷他害の行為に至り、事件や事故として報道されることも少なくない^{1)~3)}。さらに日本では、精神障害者に対する人権無視や人権侵害がないとはいえないのが現状である。このような精神障害者に関連した情報は、看護学生の意識にも反映し学習過程に影響を与える可能性は否定できない。

精神障害者に対する看護学生の意識は、精神科での臨床実習前後で著しく変化することが報告されている^{4)~6)}。本学においても臨床実習期間中、既に学生の意識の変化が観察されている。そこで今回筆者らは、本学学生における臨床実習前後での精神障害者に対する意識の変化を把握し、さらに臨床実習の間である実習1週目終了時での意識を明らかにする目的で調査を実施した。その結果、臨床実習前後の意識の相違、臨床実習の効果、実習指導などについて2,3の知見が得られたので報告

する。

I. 対象と方法

1. 対 象

東北大学医療技術短期大学部看護学科平成4年度3年次学生で、調査の主旨に同意が得られた76名を対象とした。

2. 調査内容

調査項目は、坂田ら⁴⁾が実施した看護学生の精神障害者に対する意識調査12項目から7項目を選択した。回答は「とてもそう思う」、「そう思う」、「どちらともいえない」、「そうは思わない」、「全然そうは思わない」の5段階評定とした。さらに精神科での臨床実習終了後では、小林ら⁵⁾が実施した実習後の学生の意識調査から精神障害者に対する見方の変化、精神障害者に対する看護への興味について問う2項目を選択して加えた。質問項目を表1、表3の第1欄に示した。

3. 調査期間

平成4年4月17日から平成4年11月30日。

4. 方 法

精神科での臨床実習（以下精神科実習）開始前の週（以下実習前）と、精神科実習1週目終了時（以下実習1週目）、精神科実習終了の翌週（以下実習後）の3回に渡り、同じ質問項目を用いてアンケート調査を実施した。選択肢別に度数分布を求め、さらに「とてもそう思う」に5点、「そう思う」に4点、「どちらともいえない」に3点、「そうは思わない」に2点、「全然そうは思わない」に1点を配点して平均値を算出した。実習前平均値と実習1週目平均値との差の検定、実習1週目平均値と実習後平均値との差の検定には対応のあるt検定（両側検定）を用いた。また実習後のみ調査を実施した2項目については、回答項目別に度数分布を求めた。

II. 調査対象の学習背景

精神障害者の看護に主に関連する学内の講義として、1年次に病理学II（45時間中2時間）、成人保健（30時間中14時間）が、2年次に精神保健（45時間）、成人臨床看護I（120時間中20時間）、老人

臨床看護（60時間中6時間）が終了した。

精神科実習は臨床実習の成人看護IIIの中に位置づけられ必修である。実習場は東北大学医学部附属病院神経科精神科病棟で実習期間は2週間、9名から10名の学生がグループとなりローテーションした。実習内容の中心は、看護過程を用いた受持ち患者の看護であった。

III. 結 果

1. 精神障害者に対する意識

実習前、実習1週目、実習後各々の質問項目に対する選択肢別の度数分布を表1に、質問項目の平均値と平均値の差の検定結果を表2に示した。

1) 実習前の意識

実習前で平均値が4.0以上であったのは、「精神障害をもつ人への看護は難しい（以下看護は難しい）」で肯定される傾向となった。「とてもそう思う」と回答した学生が37名（48.7%）で最も多く、「そう思う」としたものを合わせて「看護は難しい」を肯定した学生は計71名（93.4%）となった。

「精神障害をもつ人に関心がある（以下関心がある）」、「精神障害をもつ人の看護に興味がある（以下看護に興味がある）」はどちらも平均値が3.8で、「そう思う」としたものが最も多く、「とてもそう思う」としたものを合わせると肯定した学生は各々53名（69.8%）、55名（72.3%）であった。

「精神障害をもつ人に接するのが恐ろしい（以下接するのが恐ろしい）」は平均値3.2で、「そう思う」としたものが34名（44.8%）と最も多く、肯定した学生は計36名（47.4%）であった。また「どちらともいえない」としたものが20名（26.3%）、「そうは思わない」と「全然そうは思わない」を合わせて「接するのが恐ろしい」を否定した学生は20名（26.3%）であった。

「精神障害をもつ人にうまく接することができる（以下うまく接することができる）」は平均値2.1で、「そうは思わない」と回答した学生が28名（36.8%）と最も多く、否定した学生は計47名（61.8%）、肯定した学生は1名（1.4%）であった。「精神障害をもつ人を身近な存在に感じる（以下身

精神科臨床実習前後の意識の変化

表 1. 選択肢別精神障害者に対する意識

項 目	調査時期	とても そう思う	そう思う	どちらとも いえない	そうは 思わない	全然そうは 思わない	不 明
精神障害をもつ人に接する のが恐ろしい	実習前	2(2.6)	34(44.8)	20(26.3)	18(23.7)	2(2.6)	0(0.0)
	実習 1 週目	0(0.0)	7(9.2)	16(21.0)	42(55.3)	10(13.2)	1(1.3)
	実習後	0(0.0)	7(2.6)	11(14.5)	44(57.9)	19(25.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人に関心 がある	実習前	16(21.1)	37(48.7)	17(22.3)	6(7.4)	0(0.0)	0(0.0)
	実習 1 週目	20(26.3)	42(55.3)	10(13.2)	2(2.6)	0(0.0)	2(2.6)
	実習後	29(38.2)	38(50.0)	7(9.2)	2(2.6)	0(0.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人にうまく 接することができる	実習前	0(0.0)	1(1.4)	28(36.8)	28(36.8)	19(25.0)	0(0.0)
	実習 1 週目	0(0.0)	7(9.2)	45(59.2)	18(23.7)	5(6.6)	1(1.3)
	実習後	2(2.6)	22(29.0)	39(51.3)	13(17.1)	0(0.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人を理解 できる	実習前	0(0.0)	7(9.2)	47(61.8)	18(23.7)	4(5.3)	0(0.0)
	実習 1 週目	1(1.3)	23(30.3)	41(53.9)	10(13.2)	0(0.0)	1(1.3)
	実習後	4(5.3)	38(50.0)	31(40.8)	3(3.9)	0(0.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人を身近な 存在に感じる	実習前	1(1.3)	5(6.6)	22(29.0)	33(43.4)	14(18.4)	1(1.3)
	実習 1 週目	4(5.3)	38(50.0)	26(34.2)	6(7.9)	1(1.3)	1(1.3)
	実習後	22(28.9)	36(47.4)	16(21.1)	2(2.6)	0(0.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人の看護に 興味がある	実習前	14(18.4)	41(53.9)	16(21.1)	4(5.3)	1(1.3)	0(0.0)
	実習 1 週目	22(29.0)	37(48.7)	13(17.1)	3(3.9)	0(0.0)	1(1.3)
	実習後	31(40.8)	35(46.1)	9(11.8)	1(1.3)	0(0.0)	0(0.0)
精神障害をもつ人への 看護は難しい	実習前	37(48.7)	34(44.7)	4(5.3)	1(1.3)	0(0.0)	0(0.0)
	実習 1 週目	43(56.6)	26(34.2)	6(7.9)	0(0.0)	0(0.0)	1(1.3)
	実習後	40(52.6)	31(40.8)	1(1.3)	3(4.0)	0(0.0)	0(0.0)

N=76 (): %

表 2. 精神障害者に対する意識

項 目	a. 実習前 平均値	標準 偏差	b. 実習 1 週目 平均値	標準 偏差	t 検定 a/b	c. 実習後 平均値	標準 偏差	t 検定 b/c
精神障害をもつ人に接するのが恐ろしい	3.2(76)	0.9	2.3(75)	0.8	***	1.9(76)	0.7	**
精神障害をもつ人に関心がある	3.8(76)	0.8	4.1(74)	0.7	**	4.2(76)	0.7	*
精神障害をもつ人にうまく接する ことができる	2.1(76)	0.8	2.7(75)	0.7	***	3.2(76)	0.7	***
精神障害をもつ人を理解できる	2.8(76)	0.7	3.2(75)	0.7	***	3.6(76)	0.7	***
精神障害をもつ人を身近な存在に感じる	2.3(75)	0.9	3.5(75)	0.8	***	4.0(76)	0.8	***
精神障害をもつ人の看護に興味がある	3.8(76)	0.8	4.0(75)	0.8	*	4.3(76)	0.7	**
精神障害をもつ人への看護は難しい	4.4(76)	0.7	4.5(75)	0.6		4.4(75)	0.7	

() 内は標本サイズ N 値

***p<0.001, **p<0.01, *p<0.05

「身近な存在に感じる」は平均値 2.3 で、「そうは思わない」としたものが最も多く、否定した学生は 47 名 (61.8%)、肯定した学生は 6 名 (7.9%) であった。

「精神障害をもつ人を理解できる (以下理解できる)」は平均値 2.8 で、「どちらともいえない」としたものが 47 名 (61.8%) と最も多く、肯定した学生は 7 名 (9.2%)、否定した学生は 22 名 (29.0%) であった。

2) 実習 1 週目の意識

実習 1 週目終了の段階で平均値が 4.0 以上となったものは「看護は難しい」、「関心がある」、「看護に興味がある」で、この 3 項目は肯定される傾向となった。

「看護は難しい」では「とてもそう思う」としたものが最も多く、肯定した学生は 69 名 (90.8%) であった。「関心がある」を肯定したものは 62 名 (81.6%) であり、「看護に興味がある」を肯定した学生は 59 名 (77.7%) となった。

「身近な存在に感じる」は平均値 3.5 で、「そう思う」としたものが 38 名 (50.0%) と最も多く、肯定した学生が計 42 名 (53.5%)、否定したものは 7 名 (9.2%) であった。

「理解できる」は平均値 3.2 で「どちらともいえない」としたものが 41 名 (53.9%) と最も多く、肯定した学生が 24 名 (31.6%)、否定したものは 7 名 (9.2%) となった。また「うまく接することができる」は平均値 2.7 で、「どちらともいえない」としたものが 45 名 (59.2%) と最も多く、肯定した学生が 7 名 (9.2%)、否定した学生は 23 名 (30.3%) であった。

「接するのが恐ろしい」は平均値 2.3 となり、「そうは思わない」としたものが 42 名 (55.3%) と最も多く、否定した学生が 52 名 (68.5%) となった。また「どちらともいえない」としたものが 16 名 (21.0%)、肯定した学生は 7 名 (9.2%) であった。

3) 実習後の意識

実習後に平均値が 4.0 以上となった項目は「看護は難しい」、「看護に興味がある」、「関心がある」、「身近な存在に感じる」で、この 4 項目は肯定される傾向となった。

「看護は難しい」は「とてもそう思う」としたものが最も多く、肯定した学生は 71 名 (93.4%) であった。「看護に興味がある」、「関心がある」はどちらとも「そう思う」としたものが最も多く、肯定した学生は各々 66 名 (86.9%)、67 名 (88.2%) となった。「身近な存在に感じる」は「とてもそう思う」としたものが 22 名 (28.9%) となり、肯定した学生は計 58 名 (76.3%)、否定した学生は 2 名 (2.6%) であった。

「理解できる」は平均値 3.6 で、「そう思う」としたものが最も多く、肯定した学生は 42 名 (55.3%) であった。また「どちらともいえない」としたものは 31 名 (40.8%)、否定した学生は 3 名 (3.9%) であった。「うまく接することができる」は平均値 3.2 で、「どちらともいえない」としたものが 39 名 (51.3%) で最も多く、肯定した学生は 24 名 (31.6%)、否定した学生は 13 名 (17.1%) であった。

「接するのが恐ろしい」は平均値が 1.9 と全調査項目の中で最低の数値となり、否定の程度が最も高くなった。「そうは思わない」としたものが最も多く、否定した学生は 63 名 (82.9%)、「どちらともいえない」としたものは 11 名 (14.5%)、肯定した学生は 2 名 (2.6%) であった。

4) 実習を通しての意識の変化

実習前から実習 1 週目、実習後までの意識の変化を図 1 に示した。実習前から実習 1 週目では「うまく接することができる」、「理解できる」、「身近な存在に感じる」の 3 項目が危険率 $p < 0.001$ で肯定する方向に有意に変化した。また「関心がある」($p < 0.01$)、「看護に興味がある」($p < 0.05$) の 2 項目も肯定する方向に有意に変化した。一方「接するのが恐ろしい」は否定する方向に有意に変化した ($p < 0.001$)。

実習 1 週目から実習後にかけては「うまく接することができる」($p < 0.001$)、「理解できる」($p < 0.001$)、「身近な存在に感じる」($p < 0.001$)、「関心がある」($p < 0.05$)、「看護に興味がある」($p < 0.01$) の 5 項目はさらに肯定する方向に有意に変化した。そして「接するのが恐ろしい」は、さらに否定する方向に有意に変化した ($p < 0.01$)。

精神科臨床実習前後の意識の変化

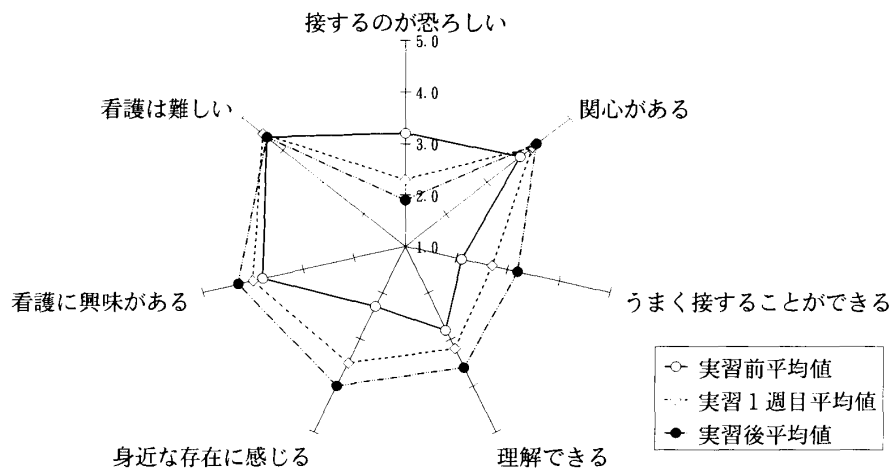


図1. 精神障害者に対する意識の変化

これに対して「看護は難しい」は実習前、実習1週目、実習後を通して平均値4.4から4.5と肯定される傾向にあり変化しなかった。

2. 精神障害者に対する見方の変化

実習後、精神障害者に対して見方が「変化した」と回答した学生は68名(89.5%),「どちらともいえない」が5名(6.6%),「変化しなかった」としたものが1名(1.3%)であった(表3)。

さらに見方が変化した内容の中で上位のものは、「何をするかわからない恐ろしいという気持ちが減少した」が23名(変化したと回答した学生の33.8%),「健康な人との境界はあいまいで誰にでも起こり得る状態」が19名(同27.9%),「健康な部分があり普通にコミュニケーションがとれる」,「親近感をもち身近な存在となった」が各々14名

(同20.6%)であった(表4)。

3. 精神障害者に対する看護への興味

実習後、精神障害者に対する看護に「積極的に取り組みたい」と回答した学生は24名(31.6%)であり、「機会があればやりたい」は47名(61.9%),「やりたくない」としたものは3名(3.9%)であった(表3)。

IV. 考 察

現代社会は複雑で変化が激しく、個人の内面にストレス状態を引き起こす要因も増大している。また平成2年の患者調査によれば、人口10万対の傷病別入院受療率は精神障害が274と第1位⁷⁾であり、心の健康に対する国民の関心は高まっているといえる。しかし一方、日本では精神障害者の

表3. 実習後の意識

質問項目	回答項目	回答数(%)
精神障害をもつ人に対して見方が変化した	変化した	68 (89.5)
	どちらともいえない	5 (6.6)
	変化しなかった	1 (1.3)
	不 明	2 (2.6)
精神障害をもつ人に対する看護に興味をもった	積極的に取り組みたい	24 (31.6)
	機会があればやりたい	47 (61.9)
	やりたくない	3 (3.9)
	その他	2 (2.6)

N=76

表 4. 精神障害者に対する見方の変化

内 容	回答数（重複回答）
何をするかわからない怖いという気持ちが薄らいだ	23
健康な人との境界はあいまいで誰にでも起こり得る状態	19
健康な部分があり普通にコミュニケーションがとれる	14
親近感をもち身近な存在となった	14
偏見がなくなった	10
理解し難い言動にも理由がある	8
心理状態は複雑で理解するのは難しい	2

権利と人権への配慮という点で世界的な流れに遅れた歴史があり⁸⁾⁹⁾, 現在でも精神障害者を容易には受け入れられない社会である。また精神障害者による自傷他害の行為に関する報道内容が, 精神障害者を避ける傾向を強めることも否定できない。このような一般的な社会の認識は看護学生の意識にも反映していると考えられる。また看護学生が, 精神科実習前にもつ偏見はさまざまで学習過程の障害になる¹⁰⁾ともいわれている。

筆者らは, 精神障害者に対する学生の意識を把握する目的で, 学習に影響を及ぼすと考えられる問題点を調査し分析を試みた。

今回の調査では実習前において, 「接するのが恐ろしい」に対し「そう思う」と回答した学生が最も多かった。そして「とてもそう思う」としたものを合わせると 47.4% の学生が精神障害者に対する恐怖感を肯定した。すなわち精神障害者と接した経験が少ないか, まったく無いことからの不安, これらに関連した事件や一般社会人の認識などが学生の意識に影響していると考えた。

しかし同時に, 実習前では「関心がある」と「看護に興味がある」が各々平均値 3.8 で, 肯定した学生が各々 69.8%, 72.3% と相対的に高率となった。このことから学生は実習前に精神障害者に対する恐怖感をもってはいたが, 必ずしも学習の障害にはなっていない。むしろ精神障害者に対する関心や看護への興味が, 精神障害者に対する多様なイメージを形成する動機づけとなったともいえる。精神科に対するイメージをもてない学生は, 看護への関心が低いという金山らの報告¹¹⁾

からも裏付けられるものと考えた。

また CAS (Cattel Anxiety Scale) を用いた調査から不安得点が高い学生は, 恐怖を感じる割合が高い⁴⁾が, 不安得点の低い学生よりも対象とのよい人間関係を作ることができる¹²⁾という報告もある。従って「接するのが恐ろしい」という否定的な意識の一因には, 自分の看護に対する学生の自信のなさや不安があると考ええる。このような学生に対する指導のあり方として, 学生がもっている精神障害者への関心や看護への興味という積極的な側面を, 指導者が意識的に引き出す必要性があるといえる。

実習前に「接するのが恐ろしい」を否定した学生は 26.3% で, 「どちらともいえない」としたものとを合わせると 52.6% となり, 精神障害者に対する恐怖感を肯定した学生の割合を上回った。精神障害者に対する恐怖感が否定されたり, 曖昧となった要因は, 精神科実習前に終了した関連講義をあげることができる。学生は講義を受けることで, まったく未知であった精神障害者に関する専門的な知識を得ることになる。その結果学生は, 各人の意識が修正されて恐怖感を否定したのと考えた。また学生は, 講義によって意識が修正されたとしても, 学生は精神障害者と接触した経験がないことから「どちらともいえない」という反応になったとも考えられた。

「接するのが恐ろしい」は実習 1 週目には平均値が 2.3 となり, 否定の方向に大きく変化した。選択肢別にみても, 肯定する学生が 9.2% であったのに対して, 否定したものは 68.5% を占めた。ま

た「身近な存在に感じる」は、実習前は平均値 2.3 で否定する学生が 61.8% であったが、実習 1 週目には平均値 3.5 で肯定する学生が 55.3% と逆転した。この結果から、精神障害者に対する学生の意識は実習 1 週目で既に変化しており、筆者らの観察と一致する結果が得られた。

さて「接するのが恐ろしい」が否定へと変化し、「身近な存在に感じる」が肯定へと変化したことは相互に関連性があるところである。つまり実習 1 週目には学生は、精神障害者を身近に感じ親近感を抱くようになったこと、そして親近感を抱くことによって精神障害者に対する学生の恐怖感が緩和されたのである。また「関心がある」、「看護に興味がある」、「うまく接することができる」、「理解できる」も実習 1 週目の段階で実習前よりも肯定の方向へと変化した。これらの変化は精神障害者を身近に感じ恐怖感が緩和されたことによる効果といえる。筆者らは精神科実習の 1 週目では、学生が受け持ち患者を受け入れ病棟に適應することに重点を置いた指導を行っている。今回の結果からこの指導方針は有効であったと考えた。

しかし実習 1 週目では、「うまく接することができる」、「理解できる」の平均値は、2.7、3.2 で、「どちらともいえない」を選択したものが半数以上 (59.2%, 53.9%) と最も多かった。これは「看護は難しい」を肯定している学生が多いことにも関係している。精神障害者に対して恐怖感が緩和し親近感が増したことは、学生にとって対象の理解や人間関係形成にプラスに働いたと考える。そのため「理解できる」、「うまく接することができる」は肯定へと変化したのである。しかし実習 1 週目は、学生が患者の理解や効果的な看護について自信が持てないでいる時期であると考えられる。精神障害者を看護することの不安や迷いが「どちらともいえない」という反応となって現れたのであろう。ここで重要な点は、精神障害者を身近に感じ恐怖感が緩和される段階を経て、学生は看護者として対象である患者との関係がつくれるようになるということである。そのため精神科実習における具体的な指導にあたっては、精神障害者に対する意識や受け持ち患者を受け入れる姿勢など学生

個々の readiness を十分考慮することが必要となる。そして学生の readiness に対応することで、より効果的な指導が可能になるのである。今回の結果から、とくに実習 1 週目終了時にこの点を考慮した指導の必要性が示唆されたといえる。

「接するのが恐ろしい」は実習後さらに否定する方向に変化し、肯定する学生は 2.6% まで減少した。またこの結果は、実習後の精神障害者に対する見方が変化したと回答した学生が 89.5% と高率であり、その内容では「何をするかわからない」という回答が最も多かったことに現れている。坂田らの調査⁴⁾では精神科の患者に接する恐怖感を肯定した学生は、実習前では 83.8%~87.3%、実習後は 57.1%~42.3% と減少した。梶本の調査¹³⁾では、実習前では 36.4%、実習後は 7.3% であった。また小林らの調査⁵⁾では、実習後に精神科の患者に対する見方が変わったと回答したものは平均 69.6% で、その内容では「恐さが薄らいだ」という回答が最も多かった。対象数や実習内容に相違はあるものの、精神科実習後に恐怖感が減少した点で筆者らの調査も先行調査と同様の傾向であった。

「接するのが恐ろしい」は実習前、実習 1 週目、実習後を通して一貫して否定の方向へ変化し、「関心がある」、「うまく接することができる」、「理解できる」、「身近な存在に感じる」、「興味がある」は逆に一貫して肯定の方向へ変化した。とくに「うまく接することができる」、「理解できる」、「身近な存在に感じる」は、実習前から実習 1 週目、実習 1 週目から実習後までのどちらとも各々肯定の方向に著しく変化した。これは、精神障害者を肯定的に受け入れ看護への積極性が増す方向への変化である。このような学生の変化は好ましいものであり、精神科実習による教育的効果として評価できるものと考ええる。

また各々の変化は、独立しているのではなく相互に関連するものであることはいうまでもない。学生は実際に精神障害のある患者とかわることで、精神障害者にも健康な部分があり普通にコミュニケーションがとれることや、一見理解し難く見えるような患者の言動でもそこにはその人な

りの理由があるということに気付いている。さらに学生は、心の健康は身体の健康と同様に連続性があり誰にでも起こり得る状態であると受けとめられるようになっている。学生は、対象の理解が深められたことによって、精神障害者に対する親近感が増し恐怖感が緩和したのである。そして、精神障害者に対する看護への興味と関心がさらに促されたと考える。また恐怖感が否定へと変化した他の要因としては、神郡ら¹⁴⁾は大学の医学部附属病院という実習病院の特徴を指摘している。すなわち、大学病院は診断の確定や初期治療が目的で入院するため、入院期間が比較的短期間であること、さらに多様な疾患患者が多いという特徴が学生の恐怖感の緩和を促したと述べている。

一方、実習後に「接するのが恐ろしい」を肯定したり曖昧な回答をした学生は17.1%であった。また「身近な存在に感じる」、「看護に興味がある」を否定したり曖昧な回答をしたものは、各々23.7%、13.1%であった。これらの学生は、精神障害者を肯定的に受け入れることが難しく看護への興味を積極的にもてない状態にあったため、指導上で課題がある。

精神病に対する意識構造に影響を及ぼす看護学生の個人特性として、学業成績、社会的イベント、精神病患者や精神病院との接触経験、入学形態などがあるといわれている¹¹⁾。また学生の個人的な生活環境の中に精神障害のある人が存在する場合、その人に対して学生が肯定的か否定的かによって、精神科実習における学生の意識や態度は大きく影響されると考える。問題が残る学生への指導は、学生の背景因子を詳細に分析して指導者としての在り方を十分配慮する必要がある。

「看護は難しい」という意識は、実習前から実習後まで常に平均値4.4から4.5であった。学生は精神障害者に対する看護は難しいという意識を強くもっており、その意識は実習1週目から実習後まで継続したといえる。しかし実習前に学生が感じていた看護の難しさは、未知に由来する不安や精神障害者に対する恐怖感と結びついており、想像の範囲内で見通しが立てられないという難しさであったと考える。精神科実習が開始して恐怖感

が緩和し次第に対象とのかかわりがもてるようになってくると、現実には精神障害者の内面で起きている現象を把握し理解することの難しさや、対象の状態に合わせたかかわりには冷静な判断と根気強さが必要であることを実感し看護の難しさを意識するのである。「うまく接することができる」という意識が肯定の方向へ変化はしたものの、実習後も「どちらともいえない」とした学生が51.3%、「そうは思わない」と否定したものが17.1%を占めたことはこの辺の事情を物語るものである。つまり学生が抱く看護の難しさの内容は、実習前では恐怖感を伴う想像の範囲であったのが、精神科実習を経験することによって現実の看護上の問題解決という実際的な内容へと質的に変化したと考える。

坂田ら⁹⁾は看護を「とても難しい」と答えたものが減少した結果から、指導が有効であったと述べている。しかし精神障害者が抱える問題は、単一ではなく家庭と社会生活全般に深くかかわっている¹⁵⁾ことを考慮すると、実習後学生が「看護は難しい」と強く意識したことはむしろ自然であるという見方もできる。そして精神科実習を通して学生は、精神障害者にかかわる看護者に求められる姿勢が理解できたものとも考えられる。

学生が学習意欲をもち主体的に学ぶ条件は、学生自身が無知を自覚し課題を意識することであるといわれている¹⁶⁾¹⁷⁾。今回の調査では、学生は精神障害者に対する看護の難しさを強く意識している結果となった。とくに実習1週目、実習後では「とてもそう思う」とした学生が56.6%、52.6%と半数以上となり実習前よりも増加した。一方で「看護に興味がある」も一貫して肯定の方向へ変化し、肯定した学生は実習1週目が77.7%、実習後は86.9%と増加した。また実習後、精神障害者に対する看護に積極的に取り組みたい、あるいは機会があればやりたいと肯定的に回答した学生は93.5%と高率となった。これらのことから学生が看護の難しさを強く意識した背景には、精神障害者に対する看護において自ら課題を認識したことがあると考える。課題を認識したことから学習意欲の向上に結びつき、「精神障害者への看護に興味

がある」の肯定となって現れたと考える。

しかし学生は、卒業時になると再び患者に対する恐怖感と偏見が増すという報告¹³⁾もある。実習終了後時間の経過とともに、「看護は難しい」という意識が、ともすると精神障害者を敬遠する気持ちにつながる可能性があると考えられる。指導者は学生の中に生じた精神障害者に対する肯定的な変化を支援し、実習後の看護や学習意欲に結びつける働きかけが求められるところである。

平成2年度から新カリキュラムが実施された。従来「精神衛生」は専門科目である成人保健の中で位置づけられていたが、新カリキュラムでは「精神保健」と名称を変え専門基礎科目の中で独立した。「精神保健」の目的は、心と身体の両面を重視し心の発達と心のはたらきに関連する要因を理解すること¹⁸⁾とされている。また診療科別看護の廃止等により、従来あった「精神科疾患と看護」と「実習」はカリキュラム上は姿を消した。新カリキュラムにおける精神科病棟での実習について、青木¹⁹⁾は精神科専門の看護婦を目指すのではなく、人間を理解し、コミュニケーションの難しさを学ぶ場として考えてもよいと述べている。つまり従来の「精神衛生」―「精神疾患と看護」という枠組みから、「精神保健」―「看護学全般に一般化された精神看護」という広い枠組みへ拡大された²⁰⁾のである。

今回の調査結果から、精神障害者に対する学生の意識は精神科実習を通して変化したといえる。これは換言すれば対象の理解と関心が深まり、人間の内面の観察やコミュニケーションなどにおいて学生が学んだということでもある。看護学生は精神障害者の看護を通して、より広く人間の内面の複雑さと内面がその人の存在に大きく影響することを実感し、精神面の看護に強く動機づけられる²¹⁾といわれている。本学学生の学びは精神障害者のみにとどまらず広く看護の対象全般に活用できる学びであり、この点で精神科実習の意義は大きいと考える。しかし一方、看護基礎教育は精神に明らかな疾患をもつ患者の看護に重点をおき、精神看護学の専門性を明確にすべきであるという指摘²⁰⁾もある。看護の基礎教育課程における精神

科実習の目標設定は、全体の教育目標と実習期間などの諸条件を考慮しながら検討を要する課題である。

おわりに

本学看護学科平成4年度3年次学生を対象に、精神科実習前から実習後までの精神障害者に対する意識についてアンケート調査を実施した。その結果次のことが明らかとなった。

実習前では精神障害者に対する恐怖感を肯定した学生が47.4%、親近感を否定した学生が61.8%であったが、実習1週目では恐怖感の否定へ、親近感の肯定へと変化した。

精神障害者を理解することや適切な関係をつくることについては、実習1週目では肯定へと変化するものの、学生は自信がなく迷う傾向にあり、学生のreadinessに対応した指導の必要性が示唆された。

実習前後を通して学生は精神障害者に対する看護は難しいと強く意識したが、むしろこれは学習意欲を向上させ看護への興味へと結びついたと考えた。また精神障害者に対する恐怖感は一貫して否定の方向へ、親近感や関心、理解は一貫して肯定へと変化した。精神科実習の教育的効果が確認された。

文 献

- 1) 河北新報：精神病院患者殺人事件訴訟，1992年6月23日（朝刊）
- 2) 読売新聞：12階から赤ちゃん投げる 精神障害の17才女性，1992年2月7日（朝刊）
- 3) 河北新報：病院逃走の患者が刺殺，1992年6月18日（夕刊）
- 4) 坂田三允，小林美子，横田 碧ほか：実習前後の学生の意識の変化，精神科看護，**26**，67-71，1988
- 5) 小林美子，坂田三允，桜庭 繁ほか：実習を通しての学生の学びと気づき，千葉大学看護学部紀要，**7**，67-73，1985
- 6) 森 千鶴，佐藤みつ子：精神科実習前と後の看護学生の意識の変化，精神科看護，**39**，63-68，1992
- 7) 財団法人厚生統計協会：健康状態と受療状況，国民衛生の動向 厚生指標 臨時増刊，**39**，80-85，1992

- 8) 桜庭 繁：精神保健法と精神科看護，看護教育，**30**, 392-400, 1989
- 9) 秋元波留夫：精神障害者と人権，精神障害者リハビリテーション，金原出版，東京，1991，p117-138
- 10) 金山正子，津山和子，川本利恵子ほか：精神病に対する看護学生の意識構造（1），日本看護研究学会雑誌，**14**, 53-60, 1991
- 11) 金山正子，田中マキ子，川本利恵子ほか：精神病に対する看護学生の意識構造（2）-入学形態，成績，接触経験，入学年度による検討-，日本看護研究学会雑誌，**15**, 65-72, 1992
- 12) 坂田三允，小林美子，桜庭 繁：CAS を用いた実習前後の不安の分析，千葉大学看護学部紀要，**8**, 27-35, 1986
- 13) 梶本市子：精神科看護における学生の意識の変化，新見女子短期大学紀要，**9**, 45-57, 1988
- 14) 神郡 博，田村文子：成人Ⅱ（精神科）実習にみられる学生の態度と変化，群大医短紀要，**7**, 73-83, 1986
- 15) 神郡 博：患者とその援助のしかた，精神科看護の世界—その機能と原点—，看護の科学社，東京，1987，p40-51
- 16) 植村研一：創造性・問題発見力を高める発見自己学習への教師サポート，看護展望，**16**, 1201-1209, 1991
- 17) 鈴木啓子：自己教育力の育成に取り組む，看護教育，**34**, 349-353, 1993
- 18) 厚生省健康政策局看護課編集：教育課程の主な改正事項，看護教育カリキュラム—21世紀に期待される看護職者のために—，第一法規出版，東京，1989, p100-118
- 19) 青木康子：カリキュラム改善—新しい内容と特色—，看護展望，**14**, 538-547, 1989
- 20) 北島謙吾：看護基礎教育における精神科看護，精神科看護，**33**, 90-94, 1990
- 21) 横田 碧：精神科看護と精神看護の方法論2，看護教育，**30**, 414-419, 1989